

風塵往来1

ホリエモンこと、堀江某氏は、おそらく分秒単位の時間の中に生きている人だろう。一昔前までは、テレビ局の制作関係の人たちがそうだった。このごろはIT関係のビジネスマンはすべて生き急いでまるで疾走しているようだ。それに比べると、芸術に生きる人は、途方もなく悠然とした時間空間に身を置いている。江戸時代にさかのほるが、良寛（一七八一~一八三二）の歌に、
「あわ
沫雪の中にたちたる三千大千世界」
またその中に沫雪ぞ降る
ということがある。この三千大千世界とは、実に広大無辺のものだ。われわれの住む世界は、四大州という。四大州のまわりには須弥山を軸に、日・月・四大海・六欲天などを含めたより大きな世界があり、それを三千大千世界とも三千世界とも呼ぶのである。良寛の歌は、降りしきる一粒一粒の沫雪の中に三千大千世界が広がっているのが見えるというのである。そしてよく見ると、その三千大千世界の中にもまた沫雪が舞い下りている。ギガとナノの両極を同時に見ている、超能力的なまでの時間空間の把握。

良寛という人は、深読みすればするほど難しい。若いころは放蕩三昧を盡したが、出家の後は俗氣をそぎ落して、清心そのものに化した。書は人を現わすというが、良寛の人となりは、その書（とくに細楷）に表われている。見る人は、間違いなく心が洗われる。

しかし最晩年の細楷「草庵雪夜」を見ると、線質が心なしか屈折している。その詩は「首ヲ回ラセバ、七十有餘年、人間ノ是非、看破スルニ飽キタリ。往来ノ跡幽カナリ、深夜ノ雪、一炷ノ線香、古窓ノ下」というもの。筆の逡巡は年齢によるものか、詩の内容によるものか。この書軸の複製を時折床にかけるが、良寛においてなおこの苦渋か、との思いを深くすることがある。本屋の立読みでもよいから、一度良寛の細楷の書をのぞいて見ませんか。心が震えあるいは経験したことのないような詩的な世界が見えないでもない、と思う。（館長 伊藤郁太郎）

展示室から

ロイヤル・コペンハーゲン

ブルー・フルーテッド 燭台（表紙）
1886年のアーノルト・クローによるデザインに基いて制作された燭台です。1880年代には、食堂の壁に備え付けの棚を設けることが流行していました。棚には中央に鏡をはめ込み、周囲にこのような燭台や時計などが飾られました。この作品はブルー・フルーテッド・スタイルにレース編み飾り、かたつむり・人物などの彫像、金彩などの装飾を加えた、たいへん華やかでかつ洗練されたものです。当時の上流階級の住居の豪華さがしのばれます。今回の展示には当初のデザイン画も出品されますが、実は作品とデザイン画では、いくつか異なる部分もあります。

写真上
アーノルト・クロー《ブルー・フルーテッド 燭台》のデザイン画
1886 63.0×46.0cm
ロイヤル・コペンハーゲン美術館
©ROYAL COPENHAGEN MUSEUM

写真下
《フローラ・ダニカ 蓋付深鉢、受皿》
1790-1803年 D:29.0cm H:22.5cm
デンマーク王宮庭玉銀器室
©HER MAJESTY QUEEN MARGRETHE OF DENMARK



編集後記

昭和60年（1985）4月に友の会が発足して、本年で20年となります。これを機会に、このたび「友の会通信」の体裁を刷新することとなりました。基本方針は「読みやすい通信」です。紙面を拡大する、文字を大きくする、カラー図版を増やす、まずはこのようなことから変えてみました。今回は大部分が特別展の開催に合わせた内容となりましたが、今後は

ホリエモンこと、堀江某氏は、おそらく分秒単位の時間の中に生きている人だろう。一昔前までは、テレビ局の制作関係の人たちがそうだった。このごろはIT関係のビジネスマンはすべて生き急いでまるで疾走しているようだ。それに比べると、芸術に生きる人は、途方もなく悠然とした時間空間に身を置いている。江戸時代にさかのほるが、良寛（一七八一~一八三二）の歌に、
「あわ
沫雪の中にたちたる三千大千世界」
またその中に沫雪ぞ降る
ということがある。この三千大千世界とは、実に広大無辺のものだ。われわれの住む世界は、四大州という。四大州のまわりには須弥山を軸に、日・月・四大海・六欲天などを含めたより大きな世界があり、それを三千大千世界とも三千世界とも呼ぶのである。良寛の歌は、降りしきる一粒一粒の沫雪の中に三千大千世界が広がっているのが見えるというのである。そしてよく見ると、その三千大千世界の中にもまた沫雪が舞い下りている。ギガとナノの両極を同時に見ている、超能力的なまでの時間空間の把握。

良寛という人は、深読みすればするほど難しい。若いころは放蕩三昧を盡したが、出家の後は俗氣をそぎ落して、清心そのものに化した。書は人を現わすというが、良寛の人となりは、その書（とくに細楷）に表われている。見る人は、間違いなく心が洗われる。

フローラ・ダニカ 蓋付深鉢、受皿

フローラ・ダニカは、同名の植物図譜集の図版部分を忠実に写して制作された晩餐会用の食器セットです。本器は、チューリンという受皿を備えた蓋付深鉢です。数人分のスープや肉の煮込み料理などを入れる大型食器で、豪華な装飾を施して食卓を華やげる重要な役割を担いました。ここでは蓋に「きんぼうげ科イトキンボウゲの一種」、鉢に「ごまのはぐさ科クワガタソウの一種」が緻密に描かれ、把手やつまみにも草花の装飾があしらわれています。文様はそれぞれ第2巻第2図、第9巻第31図を写したことがわかっています。植物図譜『フローラ・ダニカ』は、正補あわせて54巻と大部の書物ですが、今回はそのうちから一部が参考として出品されます。王室用に特別装丁されたもので、出版当時に王室からロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所に寄贈された可能性が高いとされているものです。

館蔵品展示

特別展開催中の館蔵品展示は、安宅コレクション中国・韓国陶磁約30点、日本陶磁約20点、李コレクション韓国陶磁約20点となります。

常設展・テーマ展・特集展示などからも具体的な作品をご紹介し、美術館を身近に感じていただければと考えております。伊藤館長による「美術館の舞台裏」は「風塵往来」とタイトルを一新して、より広いテーマを取り上げたエッセイとなりました。従来の形に愛着をお持ちの方も多いかとは思いますが、親しみやすい通信を目指して努力したいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。（K.N.）

◆ 特別展開催中、ミュージアム・ショップでは図録・絵葉書以外にも関連のグッズや書籍を販売する予定です。また、喫茶室でも北欧にちなんだメニュー

展覧会のおしらせ

- ◆ 特別展
デンマーク王室の磁器コレクション
ロイヤル・コペンハーゲン
4月8日（金）～5月29日（日）
- ◆ 常設展示
東洋陶磁の展開
(安宅コレクション中国陶磁・韓国陶磁、日本陶磁)
- ◆ 特集展示
李秉昌コレクション韓国陶磁
4月8日（金）～5月29日（日）
- ◆ 休館日：月曜日、5月6日（金）
開館時間：午前9時30分～午後5時
(入館は午後4時30分まで)



アーノルト・クロー《ブルー・フルーテッド 燭台》
1886-1890年 H:54.0cm ロイヤル・コペンハーゲン美術館
©ROYAL COPENHAGEN MUSEUM



図1
藍彩魚文壺
唐時代 H:20.8cm
デンマーク国立工芸美術館



図2
黄冶窯出土の唐時代の青花・藍彩資料
河南省考古研究所



図3
青花把手杯
明時代・万曆年間
デンマーク国立博物館

コバルトで釉下に絵付けがなされた藍彩、あるいは青花は中国では唐時代から制作されている。具象的な文様のある唐時代の藍彩の一例として、世界的に知られた壺がデンマークの国立工芸美術館に収蔵されている(図1)。白化粧の上にコバルトで文様を描き、施釉・焼成したもので7世紀末から8世紀のものと考えられる。この作例は青花“blue-and-white”ではなく藍彩“blue painted”とされているが、それは唐三彩と同様の胎土や釉薬が認められるからである。

一方、2004年5月に河南省鄭州市で開催された張公巷・黃冶窯のシンポジウムにおいて、黃冶窯出土の青花とされる瓷片が紹介された(図2)。これは唐三彩や藍彩とは質的に異なり、白磁胎にコバルトで絵付けをし、高火度焼成したものであった。白磁の素地の上に白化粧の層があり、その上にコバルトが施され、さらに透明釉の層がある。

また、1998年にインドネシア沖で引き上げられた9世紀前半の沈船からは、6万点にも及ぶ中国陶磁が発見され、なかに3点の青花が含まれていた。揚州唐城出土の青花に相同するもので、貿易陶磁の性格を持ったものとして注目された。

元時代(1279—1368)には景德鎮で青花の技法が完成され、製品は世界各地へと運ばれていった。ヨーロッパへは13世紀末頃から中国の磁器がもたらされたと考えられている。16世紀以降、ポルトガルによりインド航路が、スペインにより太平洋航路が開かれ、アジアに貿易の拠点が築かれた。17世紀にはイギリス、オランダなどが参入した。1970年代にセント・ヘレナ沖で発見されたポルトガル沈船デ・ヴィッテ・レーウ号や、1991年にベトナム沖で引き上げられたオランダ沈船ブン・タオ・カーゴからは、青花磁器が大量に発見され、当時の交易の様子を知ることができる。ヨーロッパに運ばれた青花は、大変貴重なものとして各国の宮殿を飾った。なかにはデンマーク国立博物館収蔵の青花碗のように金属装飾がほどこされることもあった(図3)。17世紀半ばごろからはコーヒーやチョコレート、紅茶を飲むことが流行し、磁器の碗が必要となつたために、輸入の陶磁器だけではまかないきれない需要が生まれた。

デンマークでは、記録によると1674年に初めて中国に向けて出航している。これよりずっと以前の1615年、国内初の株式会社・デンマーク東インド会社にアジア貿易の独占権が与えられた。最初のアジアへの出航は1618年にインドに向かったもので、39年までの間に18隻が出発した。しかし、1625年から29年までのいわゆる「30年戦争の第二期デンマーク戦争」に参戦したため財政的余裕がなくなり、会社は一時閉鎖されてしまった。1668年までには国力も回復し同社を再開、76年にはついに中国の福州まで航路を広げた。1732年にはデンマーク・アジアテック会社が設立され、中国と恒常に貿易が行われるようになった。当時コペンハーゲン・広東間は18ヶ月から20ヶ月の航海で、ひとつの船で4回ないし5回の航海が可能であった。1732年から1843年の貿易では中国への積荷はほとんどが銀であり、陶磁器をはじめさまざまな文物を積み帰り、競売で莫大な利益を得ていたのである。

ヨーロッパでの磁器制作の試みは、中国から青花磁器がもたらされたことによって始まっていく。16世紀の半ば以降、イタリアのフィレンツェやオランダのデルフトで、軟質磁器の制作が盛んに行われた。硬質磁器の生産がヨーロッパで最初に成功したのはドイツのマイセンである。18世紀は鍊金術的な神秘主義から啓蒙主義の科学へと移り変わる時代でもあり、鍊金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベドガーと科学者エーレンフリート・ヴァルター・フォン・チルンハウス伯爵の出会いによって磁器が制作されたのは象徴的である。1710年にはマイセンでヨーロッパ初の磁器工場が稼動し、製品はライプツィヒの見本市に出品された。しかしこの時点では青花はまだ作られておらず、中心は華麗な上絵付による色絵磁器であった。青花は1720年にはじめて作られた。マイセン磁器にはカオリナイトが多く含まれているので、高温焼成しなければならず、コバルト顔料が高温によって飛ぶのを防ぐために、コバルトにカオリナイトを混ぜて焼成するという工夫がなされた。1720年から40年の間には、フランスのシャンティーイやセーブルでも軟質磁器の生産が始まり、青花などを焼成している。18世紀半ばには、マイセン磁器はヨーロッパ各国の宮殿や貴族の館を飾るだけでなく、午餐会などで豪華な磁器のディナーセットが使われるようになつた。磁器はきわめて高価なものであり、ディナーセットは財力と社会的地位のシンボルでもあったのである。磁器のディナーセットは外交の贈答品としても使用され、即位や婚礼などの記念にヨーロッパ各国の君主たちは磁器を発注している。

ロイヤル・コペンハーゲンが磁器の生産を開始したころは、ロココ趣味の装飾から新古典主義への移行過程であった。それと同時に、陶磁器の文様は中国趣味を反映した青花が人気を得ていた。中国貿易でもたらされた陶磁器や漆器などの文物の価格があまりにも高価だったので、需要を満たすためにヨーロッパ各地での複製品の制作が試みられた。当初、シノワズリは宮廷の装飾芸術として出発していたが、次第にありふれたものとなっていった。そのなかにあってロイヤル・コペンハーゲンの「ブルー・フルーテッド」が長い人気を得ているのは、シノワズリの域をこえて流行に左右されない普遍的な文様となっていたからであろう。

1773年にノルウェーのゼケテルド山からコバルトが発見され、76年にはロイヤル・コバルト工場が建設された。ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所が設立された翌年のことである。青花の制作にとって、コバルトは必要不可欠のものであり、ノルウェーでのコバルト鉱山の発見はロイヤル・コペンハーゲンの青花の安定的な制作にとって幸運なことであった。

ロイヤル・コペンハーゲンを設立した化学者のフランツ・ハインリッヒ・ミューラーは1774年の設立趣意書

で「五彩に加えて、特に中国製の青花において使われているいわゆる群青色の青花」の制作を目指すとした。ロイヤル・コペンハーゲン磁器製作所の設立にあたっては、ユリアネ・マリエ皇太后的支援もあったが、原材料がデンマークとノルウェーの二重君主制の領土内で調達可能であったことも大きな要因であった。磁器の制作はすでにヨーロッパ各国で盛んに行われており、宮廷用の磁器を生産することは国家のステータスでもあった。デンマークでの青花の生産開始は他国に比べて遅れていたが、領土内のコバルトの発見により生産が容易となり、すぐに価格面での競争力をもつと考えられた。

また当初からミューラーは、「日常生活で使えるような」青花を生産すべきであると考えていた。焼成開始から、まさに青花はロイヤル・コペンハーゲンの基盤となる主力製品であり、磁器工場の収益の柱でもあった。青花を主力とする方針は、機会あるごとに主張された。しかし問題がなかったわけではない。初期の青花は、満足のいくものではなかった。王室がロイヤル・コペンハーゲンを支援し、特別の関心を持っていたにもかかわらず、宮廷用の高級品はマイセンから購入されていたのである。

1780年1月に、中国以外の外国製陶磁器の輸入が禁止され、ロイヤル・コペンハーゲンはデンマーク市場で独占的な立場となった。1780年には青花は大いに改善されたものとなっていた。しかしデンマークで制作されながら、デザインの大部分はマイセン磁器の写しであった。それは、磁器工場そのものがドイツを手本としたものであったからである。確かに、「ブルー・フルーテッド」パターンは中国陶磁の文様を明らかに意識したものである。太湖石に花と蝶が配置される文様は、中国の明末ごろから盛んに制作され、芙蓉手や呉州手にも多用されている。マイセン磁器では1740年頃にこの文様が登場し、18世紀半ばにはヨーロッパの各地の窯で制作された大流行したパターンである。ロイヤル・コペンハーゲンでは1776年からこの文様の青花を生産している。

マイセン磁器を写した文様にはほかに、「ブルー・フラワー」パターン(図4)がある。これは「アルト・ブランデンシュタイン」スタイルの写しである。1776年にはニュレンベルク窯とマイセン窯から、絵付師の指導者が招かれている。初期のロイヤル・コペンハーゲンの青花には、ロココ様式と新古典主義の作品が混在していた。有名な「オニオン」パターンは、現在でもマイセンで作られている。ロイヤル・コペンハーゲンでは1781年に制作が始まった。この奇妙な名前は、中国陶磁の盤の口縁部に描かれていたモモやザクロがオニオンであると勘違いしていたことによる。同じ1781年に「バード・モデル」も描かれている。中国陶磁では花鳥文はしばしば登場するモチーフである。

1790年頃になると、新古典主義的な重厚な作品に代わり、再びバランスのよいすつきりとした青花が現れた。「ブルー・フルーテッド」(図5)の文様は、凹凸の型押しのある器種だけでなく、型押しのないプレーンなものに対しても施されている。フルーテッドとは英語で“fluted”つまり笛の形のように縦長の凹凸があるという意味である。デンマークではこれを“mussel”パターンと呼ぶが、その理由には諸説ある。一つは“mussel”という色名として知られていた、コバルト・ブルーで絵付けをするからという説。“mussel”という色名は、回教徒(“muslim” デンマーク語では“musselmaend”)がペルシャから中国へコバルトを運んでいたことに由来する。“mussel”の語は本来、ムラサキ貝を意味するが、この場合は「コバルト・ブルー」の意味で使われているのである。もう一つの説は「ブルー・フルーテッド」の花文様が、中国のモモの花と関連することによるというものである。モモは“mume”といわれ、“mussel”と音から結びついているという。また別の説では「ブルー・フルーテッド」の文様が凹凸のある型押しの磁器に描かれるので、この凹凸の表面が“mussel”の貝を想起させるのだという。

1775年から1820年ごろまで、青花の絵付師は約30人在籍していた。期間やキャリアはさまざまで、作品の質にはばらつきが多かった。絵付師の給与も出来高によっていたので、どの作品を絵付けしたのかわかるように、小さなサインを入れていた。したがってしそのマークを追跡すれば、絵付け職人の技量の発展を見ることができるるのである。

1807年にイギリスのコペンハーゲンに対する爆撃によって、工場は打撃をこうむった。1810年になっても、原材料の不足から、生産は衰えたままであった。新古典主義の時代には青花はあまり優れたものではなくなつていったが、アーノルト・クローが「ブルー・フルーテッド」を再発見し、より魅力あるデザインを加えてすばらしい製品を作り出した。

「ブルー・フルーテッド」のほかに、「ハーフ・レース」(図6)、「フル・レース」の青花があるが、最近はメガと称する青花をデザインしている。これらの青花は、すでに文様自体がブランドとなっている。つまり、中国趣味の時代様式として認識されていた唐草文が、年月の経過とともにオリジナルな文様として、商標のように受け入れられていったのである。

ロイヤル・コペンハーゲンは現在、北京にも支社を構え、中国への輸出を行っている。かつて、中国の青花が高級品としてヨーロッパへ輸出されたように、今日ではロイヤル・コペンハーゲンの青花が高級な磁器として、世界中に販路を持っている。なかでも最も人気のある「ブルー・フルーテッド」のパターンは、中国から輸出された青花の文様に由来するもので、これが名を変えて世界中で愛され続けているのである。



図4
《ブルー・フラワー 蓋付深鉢、受皿》
1780～1800年頃 H:34.0cm
ロイヤル・コペンハーゲン美術館
© ROYAL COPENHAGEN MUSEUM



図5
《ブルー・フルーテッド デザート皿》
1780年頃 D:25.0cm
ロイヤル・コペンハーゲン美術館
© ROYAL COPENHAGEN MUSEUM



図6
アーノルト・クロー
《ブルー・フルーテッド 花瓶》
1885～1890年頃 H:30.0cm
ロイヤル・コペンハーゲン美術館
© ROYAL COPENHAGEN MUSEUM